

原 著

地域在住高齢者における現在歯数および義歯の使用状況・主観的評価とフレイルとの関連についての横断研究

佐藤美寿々¹⁾ 岩崎 正則²⁾ 皆川久美子¹⁾ 小川 祐司³⁾
山賀 孝之¹⁾ 葎原 明弘⁴⁾ 宮崎 秀夫³⁾

概要：フレイルと歯・口腔の健康との関連は疫学的に十分に解明されていない。今回われわれは、地域在住高齢者における現在歯数および義歯の使用状況・主観的評価とフレイルとの関連を明らかにすることを目的とする横断研究を実施した。79歳高齢者344人を解析対象とした。フレイルは、Study of Osteoporotic Fracture Criteria for Frailtyを一部改変したものを用いて定義し、目的変数とした。説明変数には現在歯数および義歯の使用状況・主観的評価を用いた。そして両者の関連を性別、体格、および精神健康状態を共変量とするロジスティック回帰分析を用いて評価した。解析対象者におけるフレイルの頻度は8.4%であった。現在歯数（1本増加ごとの調整オッズ比 [OR]=0.94, 95%信頼区間 [CI]=0.90-0.99）、現在歯数20本以上有すること（20本未満と比較した調整 OR=0.39, 95%CI=0.15-0.97）、義歯不使用（義歯使用者と比較した調整 OR=17.89, 95% CI=5.00-64.32）、主観的に義歯不具合の訴えがあること（訴えなしと比較した調整 OR=3.38, 95% CI=1.01-11.27）はフレイルと有意に関連していた。本研究結果から、地域在住高齢者において現在歯数および義歯の使用状況・主観的評価はフレイルと有意に関連していることが示された。

索引用語：フレイル, 現在歯数, 義歯の使用, 義歯の主観的評価, 横断研究

口腔衛生会誌 68 : 68-75, 2018

(受付:平成29年10月10日/受理:平成29年11月26日)

緒 言

高齢者が要介護状態になる原因の一つにフレイル (Frailty, 虚弱)がある。フレイルは、加齢に伴ったさまざまな機能変化や予備能力の低下により健康障害に対する脆弱性が増加した状態¹⁾であり、これにより高齢者の転倒、死亡リスクも上昇することが知られている²⁾。

フレイルの頻度は国や報告により異なるが、Collardらのメタアナリシスによると、65歳以上地域在住高齢者におけるフレイルの頻度は10%程度とされている³⁾。また、同年代の日本人を対象としたメタアナリシスの結果では7.4%と報告されており、年齢別にみると75～79歳では約10%、80～84歳では20%超と、年齢とともにその頻度は増加することが示されている⁴⁾。

フレイルのリスク因子として低栄養がある⁵⁾。高齢者において不良な歯・口腔の健康状態は低栄養のリスク因

子であることから⁶⁾、歯・口腔の健康は栄養という経路を通じてフレイルと関連していることが推察される。しかしながら、フレイルと現在歯数・義歯使用をはじめとした歯・口腔の健康との関連についての研究はいまだ数が十分でなく、更なるエビデンスの充実が求められている⁷⁾。

以上のことから、われわれは地域在住高齢者における歯・口腔の健康とフレイルとの関連を明らかにすることを目的とする横断研究を実施した。

対象および方法

1. 対象

本研究は2007年の新潟高齢者スタディーの参加者(全員が79歳)を対象とした。新潟高齢者スタディーは1927年生まれの新潟市住民から無作為抽出した者を対象としたコホート研究であり、1998年に600人を対象

¹⁾新潟大学医歯学総合病院予防歯科

²⁾九州歯科大学地域健康開発歯学分野

³⁾新潟大学大学院医歯学総合研究科予防歯科学分野

⁴⁾新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野